

総合文化研究所 Workshop Series 第六回

プラトリーノフ『ジャン』のもう一つの結末についての再考

報告 古川哲

『ジャン』は、アンドレイ・プラトリーノフ（一八九九—一九五二）が、作家同盟の依頼により中央アジアを取材して書いた中編小説である。この作品は一九三五年に完成されたが、作家の死後の一九六六年になって発表された。その後、この作品が一九七八年に改版されたとき、作品の細部において様々な違いがみられる以外に、一九六六年版の結末に追加するかたちで四章が配置されていた。一九六六年版は、モスクワから派遣された主人公が中央アジアで破滅に瀕した民族を救済し、その後その民族が主人公のもとからそれぞれの故郷へと旅立つという結末（以下、「結末A」という）を持つ。一九七八年版は、いったん旅立った人々が再び共同体を作るという結末（以下、「結末B」という）を持つ。

『ジャン』に関する版の異同については、ソ連時代の死後出版における校閲の問題と、作家が創作において最終稿に至る作品の執筆過程とを分けて考える必要がある。そのうち作品の執筆過程に限って言えば、結末Bは文学作品への厳しい統制が行われた時代に作品を世に出そうとプラトリーノフが執筆の最終段階で書いたものだということが定説となっている。一九七八年版の出版後、手稿の研究が進み、ソ連時代の校閲による修正を除去する方向での校閲が進んだのちに成立した八巻選集

（二〇一二年刊行）でも、結末Bが採用されている。本発表の趣旨は、手稿研究が進んだ現時点において、結末の違いが作品全体の解釈にどのような違いを生むかを、改めて考察することにあつた。

結末Aは、救済される少数民族の自由な意思を強く印象付ける効果をもつと考えられる。それに対して結末Bは、中央から派遣された人物が少数民族を最終的には自分の意図通りに指導しているという点では、民族の離散という挿話が持つ衝撃は弱まっている。それにもかかわらず、追加された四章は中央アジアの風俗について豊かな内容を含んでいる。結末Bは物語の完成度を犠牲にしているが、過剰な要素を内部に抱え込んでいることによる魅力がある。

今回成し得た考察は素描的なものだ。しかしそれは、ソ連において文学に対する国家的な統制が続くという状況のもとで、一九三〇年代に執筆された『ジャン』が一九六〇年代以降に蘇るときに込められていた意図について考察することへとつながっている。スターリン期に書かれたプラトリーノフ作品の読解は、後期ソ連を研究するためのアプローチになりうるのだ。

発表日 二〇一八年七月四日（水）